顕現後第５主日　　２０２５年２月　９日

風のように

甘木教会
主任牧師：白川道生　　牧会委嘱牧師：竹田孝一

わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」　　イザヤ６：５

そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。とにかく、わたしにしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした。　　Ⅰコリント１５：８―１１

イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」 11 そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。った。
ルカによる福音書５：１０－１１

【説教要旨】　召命―弱きものが招かれる

今年は嬉しいことですが、牧師として召命を受けた神学生が牧師となる按手式が行われます。

イザヤ、パウロ、ペテロの召命の物語が今日の聖書の日課です。佐藤優氏の「13歳からのキリスト教」という本の中の「神から何かしらの使命を与えられることを『召命』という」という項で、「神から

誘われること、そして何かしらの使命を与えられることを『召命』と言います。わたしが選択するのでなく、『神が呼びかける』のです」と言われています。「わたしは主の御声を聞いた」とイザヤは神の呼びかけを聞き、「サウル、サウル」というイエスさまの声をサウル、パウロは聞き、「イエスはシモンに言われた。」とイエスさまの声をペテロは聞きます。3人は、神の呼びかけを聞いたのです。これからも神は呼びかけ召命を起こすのです。
「神から誘われること、そして何かしらの使命を与えられることを『召命』と言います。」と言うように、イザヤに、パウロに、ペテロに使命を与えます。ペテロの召命にイエスさまは「今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」と使命を与えられました。宣教ということです。「御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。Ⅱテサロニケ4:2」とパウロは言います。
今日は、教会定例総会です。社会の激変下の中で私たちは危機に置かれています。しかし、だから、今までよりも神は私たちに呼びかけています。「御言を宣べ伝えなさい。」と。「イエス・キリストが弟子を招いたのは、まさに『召命』です。その圧倒的な力に、そのほかの状況など考えることも出来ず、選ばれた者としての喜びと、神への畏怖で、ただもう付き従うしかない。(「13歳からのキリスト教)」とあるように、「御言を宣べ伝える」ということは、社会の激変下の中で私たちが危機にあっても、宣教の使命を与えられた私たちは選ばれた者の喜びをもって、神への畏怖で、ただもうイエスさまに付き従っていく圧倒的な力のみが真実として私たちに降り注いできます。だから、私たちの知恵からすれば理解できないような行動が出来るのです。「彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。」。
「召命を受けた者は、いかなる制限も条件もつけずに主に献身する。(『人間への途上にある福音』フロマートカ著　平野清美・訳、佐藤優・監訳、新教出版)」 今、この危機の中で、いかなる条件もつけずにペテロが舟を陸に引き上げ、すべてを捨てて

イエスに従ったように御言を宣べ伝えるように招いておられます。それは使命であって、恵みです。

パウロは、心から躍動する喜びの言葉を私たちに伝えています。神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。

こういう危機にあって、御言を宣べ伝える相手とは、まずは自分自身です。今の時こそ自分と向かい合わなければならない時ではないでしょうか。自分は汚れた者であり、一番小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのないものです。しかし、小さな弱い者に神は呼びかけるのです。御言葉を宣べ伝えよと。

「どんな危機も、よい知らせを秘めています。それを聞くには、心の耳を澄まして聴くことを知らねばなりません」と教皇フランシスコが言われるように、この弱き私たちを招いていおられるということ、どんな危機にあっても、弱い者ゆえに「神の恵みによって今日のわたしがあるのです。」とことを私たちに起こしてくださいます。死さえ自分の近くにあって、自分を脅かす危機にあっても、みなさん一人一人が、神の恵みによって今日のわたしがあるのです。ここに立つ。ここから私たちの力が湧いてくるのです。「わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。」という出来事が私たちに起こされます。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」のです。

神の恵みによって今日の私たち一人一人があり、神に呼びかけられています。危機にあって自分の世界だけに留まっている私たちを揺り動かし、私たち一人一人が喜びにも苦しみにも満ちたこの世界に豊かな神の愛の恵みがあることを私たちに気付かせるために宣教と言う手段を用いて世界へ漕ぎ出せと召命を与えてくださいます。そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。選ばれた者としての喜びをもって、ただもう共に付き従って「御言を宣べ伝える」という宣教の恵みの座に。

牧師室の小窓からのぞいてみると

老害という言葉がある。特に自己中心となり、自分を中心として世界が回っていると思っている。「老害」という言葉をインターネットで調べると「『老害』というと無茶を通そうとしたり、時代錯誤な主張をしたり、時代錯誤な主張をしたり、高圧的な態度を取ったりする。・・・・理不尽に大声で怒鳴りつける、自分の考えが絶対だとばかりに押し付けてくる、他人の意見には耳を貸そうとしない・・・」とある。自分に言われているようだ。自分も園長など「長」が付くものから引きどきかと思うことがしばしばある。

トランプ大統領の大領令をみているとまさに老害だと思ってしまう。大国、ロシアのプーチン大統領、中国の習近平主席などの言動をみているとやはりそう思ってしまう。大国が老害ゆえに弱い国はどれほど困っているだろう。

今、地球は「老害」で滅びへと進んでいると思う。では、そうならないためにはどうすればよいか。しかし、最も民主主義なアメリカの国民がこの選択をしたことは、地球全体が老いてきているのかもしれない。

園長・瞑想？迷走記

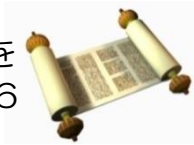
大雪警報が出ていて、園バスを動かすどうか。この判断によって、休園か自由登園にするかを決めなければいけない。引退して、こういうことから解放されると思っていたのに、園長を引き受け、優柔不断の私がこの決断が重いものとなり胃の調子が悪い。自分が登園しながらぶつぶつ「もうやめよう」と弱音。

東京の学校法人幼稚園は3月に理事会で、その議題、資料作りをする。今回は、仕事が大変だとぐずぐず言う責任者に切れて老害の典型、「いい、私がやるから」と宣言し、作っている。

どちらにしても、老いからくるものである。組織に囚われずに自分が好きなような幼稚園を老人たちだけで積極的に自分で作るのが老を生きる事かもしれない。

日毎の糧

138:6 主は高くいましても／低くされている者を見ておられます。　　詩篇１３８：６



「ルターの言葉から」

信仰から主における愛と喜びが流れいで、愛から隣人に仕えようとする快活で喜ばしく自由な精神が流れでる。

『ルター著作集第１集　2『キリスト者の自由』』　徳善義和訳　聖文舎

小さき者に

「信仰者たちはこうした歴史の背後に、『低き者』に眼を注ぎ、これを高め、自らの力を誇る『高き者』を低くする神ヤハウェの意思をみとったのである。そして、『地の王すべて』がそのことを認め、神ヤハウェに帰依する時代の来を待ち望んだ。

こうして、古代イスラエルの信仰者たちは、バビロニア捕囚期以降、彼らの民族神ヤハウェを万物の創造神にして、人類の全歴史を差配する唯一絶対の神として宣揚していく。しかも、その唯一神ヤハウェの偉大さは、すべてを超越した高き存在にではなく、砕かれて、小さく、貧しくされた『低き者』に眼を注ぐことにおかれていたのである。それが旧約聖書における唯一神信仰の逆説的特色である。・・旧約聖書のこのような神観が『小さき者の神』としてナザレのイエスに引き継がれてゆくことはいうまでもない。（「詩編の思想と信仰Ⅵ」　　月本照男　　新教出版）」

私たちは小さく力がない、しかし、小さいゆえに神の眼差しは強く注がれていることを信じて今を生きていこう。

祈り：主よ、あなたの眼差しに励まされ、いと小さき者に仕えるものとしてくださいますように。アーメン。

甘木通信

神学生の時、最初に出席した小岩教会の教会学校で責任をもった子（62 歳）が急に天に帰ったという知らせをもらった。自分の生活のスタイルを貫いた子だった。教会学校以来、教会を離れずにいつも静かに教会学校時代の皆をリードしていた。皆に尊敬されていつも教会の代表役員をし、最後まで忠実に教会に奉仕をくださった。先週の教会総会も仕切って、「また来週」と元気に別れたと知らせてくれたＳ君が話してくれた。数えることが出来ないたくさんの宝の思い出がある。順番が違うだろうと言いたい。

ルターは、「生と死の講話」の中で、「キリスト者はその臨終のときに、自分がひとりで死んでいくのではなく、サクラメントの教示にしたがって、多くの目が自分に注がれていることに疑いを懐いてはならない。まず第一に、神とキリストの目が注がれている。・・・・次には、愛する天使・聖徒たち・すべてのキリスト者が見守っている」と言っている。

母の面倒を見ながら生涯を独身であった。一人ではなかった。神とキリストが共にいた。そして、最後まで教会と言う交わりの中で、教会学校からの友だち、キリスト者と共にいた。思い返せば 70 歳で天に帰られたＤ牧師と君たちはよく飲んで楽しんでいた。うらやましいほど多くの人たちの愛に満ちた目の注ぎの中で生きた。きっとＤ牧師の温かい目があなたを天で迎えてくれているに違いない。本当にここまで教会を支えてくれてありがとう。

（「生と死の講話」知泉書房　金子晴勇訳）

（甘木日記）土）花壇の手入れで早く甘木へ。聖和幼稚園の感謝礼拝、感謝会の準備で役員会が集う。準備担当の文書を作成。何度か役員会、主任牧師と遣り取りをする。日）礼拝後、すぐに久留米の教会総会へ向かい、幼稚園の報告をする。月）昔、昔の教会学校の生徒が急に天に帰る。順番が逆。火）雪が降る。園児は喜ぶがこちらは通園バスをだすかどうかで胃が痛む。Ｈ幼稚園の理事会の資料を送る。水）今日もバスを走らせるかどうかを大雪警報で朝から振り回される。木）センスのないポスター作り。Ｈ姉にあとはよろしくとメール。金）帰宅は 20 時近く。外は寒い。

おまけ・牧師のぐち（続日記）**牧師だって神さまの前でぐちります。ぐちらない聖人（牧師）もいますが。**

土）早く三色すみれを植えるために甘木に出かける。植える終わる時、雨が降り出す。午後から羽村幼稚園の「認定こども園」変更の説明会に zoom で挨拶。夕刻は、聖和幼稚園の感謝礼拝、感謝会のプログラム合わせで役員会でした。夜には役員会で決まった準備に取り掛かる。案内状、宛名名簿を作成。よく働く。日）天気も回復し始め、礼拝前に植え残った苗を植える。礼拝出席はいつものよりも少ない。まだまだ数を見ている自分の未熟さを絶望。数ではない、ここに集う人々、キリストの声を聞くことである。午後から久留米教会の総会で日善幼稚園の報告と 2025 年の教育、保育の指針を報告。「少し、肩の力を抜いてお励みいただければと思います。」と慰めのメールをいただき感激。生き急いでいると自分を感じています。しかし、時代と教会の状況という自分の足元をみるときにいると時間がないと。**わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました**と言って終わりたい。月）朝から H 幼稚園の理事会書類の準備とメールの遣り取り、N幼稚園の防火訓練の案内状の作成、S幼稚園の感謝礼拝の案内状推敲、説教作りとやっていると何をしているのか分からないように思えるがこれがその時、その時に切り替えられる脳がまだあるが、老いの低下は気を付けなければいけない。低き所にこそ神がいるとうそぶいている。神学生の時に最初にもった教会学校の子が急に天に旅立った。教会学校から今まで忠実に礼拝に出て、教会の舵取りをした。未だに信じられない。火）雪の中で園児がはしゃいで遊んでいる。雪はどうして心を捉えるのだろうか。しかし、豪雪地帯ではそんな悠長なことは言っておれないだろう。水）バスを走らせるかどうか。大雪警報で朝から振り回される。雪は子どもたちの遊び道具、楽しく遊んでいる。水仙の花が開花。雪が似合う。木）幼稚園の理事会の準備、聖和の感謝礼拝のポスター作り。あきれるほどセンスがない。金）天候が変化する。帰る時は雪、土は凍りついている。山間部にいる方の車の運転が心配。無事に帰宅して欲しい。